

日本のポンペイ

〈 渋川市の遺跡を探る 〉

No.15

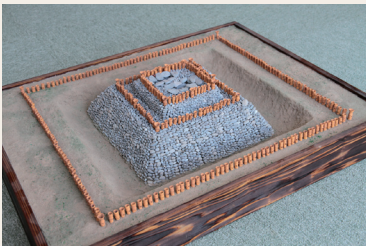
『東町古墳』

先月まで3回のシリーズで、元群馬大学教授の尾崎喜左雄氏と渋川の遺跡との関係を紹介しました。今回紹介する東町古墳も、尾崎氏の群馬大学史学研究室が調査した遺跡です。

東町古墳は、JR上越線と吾妻線の分岐点の北東にあった古墳で、昭和40年に発掘調査が行われました。墳頂部の一辺が約5畧の方形の積石塚と呼ばれるもので、墳丘には河原石が積み上げられています。また、墳丘の形に添うように墳頂部の縁辺と裾部に円筒埴輪が二重に並んで出土しました。6世紀初頭に噴火した榛名山の火山噴出物(火山灰や火砕流)で覆われている、古墳が造られたのは5世紀後半頃だったと推定されています。

墳丘上部のみの調査であったため、古墳全体の形状などは分かっていません。しかしながら、墳丘上部の構造や埴輪列の在り方から、被葬者が渡来系集団のリーダー層と想定されている高崎市下芝谷ツ古墳のような方墳であったと想像されています。

この東町古墳以外にも、金井東裏遺跡や空沢遺跡など多くの遺跡で、渡来文化の要素を持った遺構や遺物が確認されています。これらのことから古墳時代の渋川地域では、渡来文化と関係が深い人々が暮らしていたことがうかがえます。



東町古墳の想像復元模型